

# TOKYO MIDTOWN

特集3

## デザインする街—5

### オープンスペースとの共生 〈東京ミッドタウン〉

多様性を追求した都市の理想像「東京ミッドタウン」は、東京の新しいシンボルとして2007年3月30日にグランドオープンした。歴史深い赤坂9丁目、敷地面積は旧防衛庁本庁舎跡地の約6.8haに檜町公園を含め、計画面積は約10.1haに及んでいる。敷地内には、都内最高層のビル、ミッドタウン・タワー（地上54階、地下5階、高さ約248m）を含む6棟の建物が建っている他、広大な緑地を含め、敷地の約40%を占めるオープンスペースが広がっており、これが「東京ミッドタウン」の大きな特長になっている。誰もが楽しめるオープンスペースによって地域に開かれた開発を志向し、計画地だけではなく周囲の街とともに成長し、六本木エリアそのものを変えていく存在になることを目指している。今回はオープンスペースに焦点を当てた構成である。

## 〈オープンスペースとの共生〈東京ミッドタウン〉〉本論 東京ミッドタウン誕生の経緯

山本隆志  
TAKASHI YAMAMOTO

「特集3」 デザインする街 5

はじめに

「東京ミッドタウン」は2007年3月30日、旧防衛庁跡地、東京・六本木にグランドオープンした。以来、大変な活況を呈し、5月までの来街者は約780万人に達した。

この土地は1999年6月に防衛庁跡地利用の方針が決定・公表され、2001年9月に入札が実施された。同年5月には一般競争入札の公示がなされ、要項には地区計画や開発手法、事業者負担などが明示されたが、基本的には価格による入札であった。入札は「9.11」のテロの直後に当たり、日本経済は極めて厳しい状況で、投資意欲もかなり減退していた。そのような状況ではあったが、街づくりを本業とする三井不動産としてはこのプロジェクトをぜひ実現させたいと考えており、入札の公示1ヵ月前には、既にプロジェクトチームを立ち上げ、トップが陣頭に立ってプロジェクトを推進、「日本を代表するプロジェクトをぜひ実現したい」という強い意志をもって入札に参加した。

幸いにして落札することができた。具体的な基本計画を立案するにあたり、最終的には10haを超える規模の「日本を代表する大規模プロジェクト」でもあり、外部からの英知を導入する目的で国際的なコンペを行った。結果とし

てマスターアーキテクトにSOM、これをサポート・実現するために日建設計にコアアーキテクトをお願いした。更に、さまざまな個性が集まることで新たな発見や創造が生まれることを期待し、多くの建築家・デザイナーに参画していただいた。

### 三つのコンセプト

開発コンセプトとして「Diversity」、「Hospitality」、「On the green」を設定した。このコンセプトの上に開発ビジョンとして「JAPAN VALUE」を掲げた。日本が本来持っている底力のようなものを表す言葉として、「ジャパニーズバリューズ」ではなく、敢えて「日本の価値」と名詞で言い切った。それは前述したとおり、当時の日本が元気を失って、経済も冷えきっていた時期であり、私どもがこの大規模再開発に取り組むからには、日本に元気を取り戻す起爆剤にしたいという意思があった。世界に誇れる本来の「日本の価値とは何か」を考えた時に出てきた開発コンセプトが「Diversity」、「Hospitality」、「On the green」の三つであった。

一つ目の「Diversity」について。日本は昔から、外国から多くを学んで消化し、新しい価値を生み出してきた。この言葉には「東京ミッドタウンには、いろいろな要素が混ざり合うことによって、足し算ではなく、掛け算の付加価値が付くような街にしたい」という気持ちが込められている。

二つ目の「Hospitality」については当初から明確にこの方向を打ち出していた。やはり日本の価値の一つは“おもてなしの心”であり、それが日本

やまもと・たかし—三井不動産 東京ミッドタウン事業部事業グループグループ長/1990年、三井不動産入社。横浜支店、住宅事業本部を経て、2003年4月から東京ミッドタウン事業部。商品企画全般、商業、ホテル、住宅、美術館などを担当。

らしさの表現であると思ったからだ。私どもを始め、商業テナント、清掃や警備を含め、ここで働くスタッフ全員がホスピタリティー研修と呼ぶ接客研修を受講しているのは、その具体例の一つと言える。

三つ目の「On the green」は、当開発には緑をできる限り多く配し、既存の樹木なども含め緑を大切にしたい思いもあったが、更に人と自然が共生する開発を目指したことに基いている。整備した緑地は、一般に開放し、憩いのスペースとした。また、地区計画の一部として行った港区立檜町公園の整備は、地域住民の方々とのワークショップで話し合いながら進めた。敷地のうち緑地が2ha、檜町公園の2ha、合わせて4haを一体化することで、都心部の再開発ではまれな、広大な緑のオープンスペースが確保できた。

### 都心の上質な日常

「東京ミッドタウン」は、その賑わいを創出するために大部分の低層部とガレリアと呼ぶモールを商業施設としているが、そのコンセプトは「都心の上質な日常」である。六本木はもともと「飲食店は多いが、モノが売れない」と言われ、「六本木ヒルズ」が出来るまで物販はほとんどなかった。そこで開発にあたり、「どういったものが本当に必要とされているか」を知るため、港区居住者を対象にインタビューやアンケートを継続的に試みてきた。

その結果として「日常使いの店が少ない」という結果を得た。例えば超高級スーパーはあっても、「日常生活に適切な品質のものを、適切な値段で買いたい」というニーズは満たされていないようだった。そこで、継続的に多くの方に来ていただける、時間が経つにつれてその価値が上がる店舗づくりを

目指すこととした。顧客ターゲットは、自分を演出するものを自分で選択できる、自分自身の選択眼をもった大人たちとし、「ライフスタイルアーティスト」という造語でネーミングした。“都心の上質な日常”はそこから出てきた言葉である。

### タウンマネジメント

最後にタウンマネジメントについて触れておきたい。三井不動産は総合不動産業として、ビルの管理会社、商業施設の運営会社、賃貸住宅の管理会社と、個々に専門会社を持っている。機能別に会社が分かれていることは、専門的ノウハウが蓄積でき、かつ効率的といったメリットが多々ある。一方、このプロジェクトは必然的に複合施設になるため、その特徴を最大限に生かす、複合のメリットを最大化するためにはどのような形がふさわしいかを考えた。「東京ミッドタウン」が、これまで挙げたビジョンやコンセプトを具現化するような、絶えず新しい何かが生まれる街になるには、単機能の街にはない刺激や活気、魅力が必要ではないか。住宅が隣接することによって、オフィスに何ができるか、商業施設が住宅向けに何ができるか、ホテルと住宅が同じ場所にあることでどんな付加価値がつけられるか、それらを十分に検討し、具体的な仕掛けを積極的に創っていくことで、利用する方に「複合施設で良かった」と思っていたいただきたいと考えた。そういう新しい価値をこの街の特色にしていくこと、そのためには、全体を見る視点が必要だった。単に既存の専門会社の機能を集めるのではなく、「東京ミッドタウン」を専門に管理運営する会社を持つべきだという結論に達した。

もう一つの視点は、タウンマネジメ



上—上空から見たミッドタウン  
下—ガレリア吹抜け

ントを通して、周囲の街と共生したいとの思いであった。もともと防衛庁は堀に囲まれた閉鎖的な場所だった。しかし、新しく誕生した「東京ミッドタウン」は街として地域の方と良好な関係を築いていきたいと考えた。そのためには東京ミッドタウンマネジメントが地元を根をはり、この地で、近隣町会や商店会の方々と、話し合いをしながら、地域の一員として、地域とともに盛り上げていければと思っている。

同じことが「六本木ヒルズ」との間にも言える。ある意味でライバルではあるが「六本木を良い街にする」という目的の下ではいろいろな面で協力しあって行きたい。また、更には、“赤坂のTBS再開発”とも連携し、その間をつなぎ、赤坂から六本木、麻布十番に至る、東京の「ミッドタウン」全体の活性化に貢献できればと考えている。

「東京ミッドタウン」

はそれぞれの機能が刺激し合いながら、街として発展していくことで、観光地ではなくて日常の延長にある場所として、都心を新しく活性化できるのではないかと考えている。✿



「東京ミッドタウン」周辺

〈オープンスペースとの共生〈東京ミッドタウン〉〉本論  
**時と空間が連続した街づくり**  
**「Town on The Green」**

西島 肇  
 HAJIME NISHIJIMA

「特集3」 デザインする街 5

「東京ミッドタウン」は文字通り東京の中心に位置するプロジェクトであるが、都心の新しい開発の中では例のない広大な緑地によるオープンスペースが確保されている。ミッドタウン・ガーデンと檜町公園を合わせると、約4haの緑地が東京の中心に出現したことになる。かつてこの地は、江戸時代に萩藩毛利家が下屋敷を構えていた場所であり、敷地内に見事なヒノキ林があったことから「檜町」と呼ばれ、緑豊かな街であった。その記憶を継承し再現するため、旧防衛庁時代のクスノキやサクラ、カエデなど約140本に及ぶ樹木が保存され移植された。移植作業に際しては、根を傷めないように日本に数台しかない掘削機械を導入した。通常、新規開発の場合、新規に樹木を植栽するため、お世辞にも豊かな緑という感じは持つことはないが、「東京ミッドタウン」の場合、森の中に新しい建物が建ったような印象を受ける。都心にいながら自然の中で働くこと・憩うことが実現し、想像力を最大限に活性化させる“付加価値創造の場”を提

供することができた。グランドオープンの際も、満開のサクラが来訪者を迎えた。明治以降、陸軍、米軍、防衛庁と主に軍事関係に使用され、長く市民生活から隔絶されていた地が、本開発の緑地によって解放されたかのような印象を受ける。かつてこの地は、江戸時代に萩藩毛利家が下屋敷を構えていた場所であり、敷地内に見事なヒノキ林があったことから「檜町」と呼ばれ、緑豊かな街であった。その記憶を継承し再現するため、旧防衛庁時代のクスノキやサクラ、カエデなど約140本に及ぶ樹木が保存され移植された。移植作業に際しては、根を傷めないように日本に数台しかない掘削機械を導入した。通常、新規開発の場合、新規に樹木を植栽するため、お世辞にも豊かな緑という感じは持つことはないが、「東京ミッドタウン」の場合、森の中に新しい建物が建ったような印象を受ける。都心にいながら自然の中で働くこと・憩うことが実現し、想像力を最大限に活性化させる“付加価値創造の場”を提

本計画のマスタープラン作成の作業をスタートするに当たり、街全体のデザイン監修を行うマスターアーキテクトが選定されるのとほぼ同時に、ランドスケープアーキテクトが選定された。「東京ミッドタウン」の街づくりを考える上で、計画の初期段階からランドスケープデザインは非常に重要な要素として考えていた。ランドスケープのデザインを担当したEDAWによると、緑地の外苑東通り入り口を深山と湧水が湧き出る泉に見立て、檜町公園まで連続する緑地を約7mの高低差を利用して、「高原の湧水ゾーン」・「山のせせらぎゾーン」・「森のエッジゾーン」・「芝生広場ゾーン」・「檜町公園ゾーン」の5つのゾーンに分けて考えられている。山で湧き出した湧水が海に向かって下りてくるようなイメージである。それぞれのエリアで植栽や水に変化を与え、さまざまな風景が連続している。「高原の湧水ゾーン」では、急流のイメージを噴水で表現した。ミヤマオダマキ、シバザクラ、クロッカス、

にしじま・はじめ—日建設計 プロジェクト開発部門  
 プロジェクトマネジメント室長／1965年生まれ。1993年、日建設計入社。設計室・企画開発室を経て、2007年から現職。

リンドウなど高山系の植物が植栽されている。また、モミの木でゲート感も演出している。「山のせせらぎゾーン」では、水の流れは次第に緩やかになり、シャガ、アヤメ、タマシダなどの高原系の植物が植栽されている。また、緑地に沿って計画されている敷地内通路にはサクラ並木も植栽されている。「森のエッジゾーン」では、敷地の境界線近くでクスノキがうっそうとした森をつくっている。また、歩道沿いにはドウダンツツジ、ナンテンなどの低木系が配されている。「芝生広場ゾーン」は来訪者の憩いの場を想定し、芝生は数種類を混ぜ合わせて、エバーグリーンを実現している。奥のアートの背後には、秋に色付くイチョウの巨木が植栽されている。またここは、非常時にヘリポートとしても機能することが可能である。周辺住民とのワークセッションを経て、港区と共同で再整備した檜町公園は、湧水が流れ着く池、毛利家をしのばせる植栽、伝統色のアート遊具などを配置している。毛利家ゆかりのツバキやナツミカンの木を植えるなど、土地の記憶を受け継ぐさまざまな要素が配置されている。

「東京ミッドタウン」の植栽の種類は約100種ほどに上る。樹木は、中木を避けて高木と低木を配し、見通しを良くするなどセキュリティに配慮した計画となっている。また、マスタープランの当初から、ガレリアから芝生広場に架かるブリッジなど、商業施設の回遊性に通じるアイデアも盛り込まれている。商業エリアからの視覚にも配慮し、飲食ゾーンの足元には緩やかにカーブする敷地内通路に沿って季節を彩る植栽を配置した「花のアプローチゾーン」を計画し、外部のウッドデッキと一体となって商業エリアを華やかに演出している。



芝生広場ゾーン 憩いの広場を演出しながら、ガレリアからのアイストップ的な役割となっている



ランドスケープデザインのゾーニング

外苑東通りとタワーの関係にも着目し、マンハッタンのロックフェラーセンターと5thアベニューの関係性と同様に、アクセスをしやすく明快なアプローチによって連続した人の流れを演出した。日本庭園に見られる岩や植物といった要素が、庭園自体のランドスケープと常に少しずつ重なり合う関係を空間に取り込み、「JAPAN VALUE」という概念と日本庭園という概念をシンプルに、抽象的に重ね合わせている。

「東京ミッドタウン」のランドスケープは、建築とともにアートとも一体となった“街づくり”というコンセプトも実現している。アートディレクターの清水敏男氏と初期段階からコラボレートをして、さまざまな要素が混じり合い刺激し合っ、新しいものを生む「ハイブリッド・ガーデン」のコンセプトの下、日本庭園にヒントを得ながら、日常的に使う場所にアートをどのように盛り込むかについて検証した。「東京ミッドタウン」のアート計画は、国際的に活躍するアーティストと若くて力があるアーティストをそれぞれの

個性に合わせて配置することにより、ランドスケープの考え方に、より強い場所性と動きを与えることが可能になった。

大きな緑地と、外苑東通りの街路樹に移植されたクスノキ、プラザを彩るカエデと竹によって緑に取り囲まれた

「東京ミッドタウン」は、植栽と建物とアートが一体となり、それぞれのシーンが風景として連続してつながっている。\*



高原の湧水ゾーン 人々を緑地へ導く水景施設



森のエッジゾーン 山から出て高原に至る境界エリア



山のせせらぎゾーン 敷地奥の「21\_21DESIGN SIGHT」に導びく、緩やかに流れるせせらぎ



花のアプローチゾーン 視覚的にも機能的にも商業エリアの外部と内部を連続させている

〈オープンスペースとの共生〈東京ミッドタウン〉〉コラム

## 東京ミッドタウンのアートワーク

清水敏男  
TOSHIO SHIMIZU

「東京ミッドタウン」では、早い時期からアートワークの導入が計画されていた。私とジャン＝ユベール・マルタン2人のアートディレクターが選定され、アートワークのコンセプトづくり、アーティスト、作品の検討を行い、事業主、建築家、ランドスケープデザイナー、インテリアデザイナーたちのコンセンサスを得ながら計画は進行された。

「東京ミッドタウン」のアートワークのコンセプトは「ハイブリッド・ガーデン」である。これは“さまざまな要素が混交することで新しい価値が生まれる庭園”という意味を含めたもので、「東京ミッドタウン」が広大な緑地を有していること、この地には江戸時代に萩藩の屋敷があり、庭園が有名だったことなどがその発想の源泉である。

アートワークは街づくりの重要な要素であり、そのためにはアートワークが街の中で有機的な意味を持たなくてはならない。当初、アート計画を始めるに当たり最も重要な問題は、広大な土地に展開されるアートワークをいかに意味付けるか、どのような秩序を与えるか、ということだった。寺院伽藍、都市モデル（四神<sup>【\*】</sup>）などが検討され

たが、最終的には“庭園”という概念が最も適切であると思われた。日本において広大な場所をオーガナイズする思考として庭園は最も効果的であり、深く浸透している。庭園はさまざまな要素を受け入れる奥深さを有し、現に日本文化のほとんどは庭園で育まれてきた。

建築の並ぶエリアを都市のエネルギーと重ね合わせて「光の庭園」とし、緑のエリアを都市の癒しの場と考え「月の庭園」であると想定した。そして、それぞれにメインアートを中心にアートワークを配した。

「光の庭園」では地下1階の南端にあるプラザに天窓を穿ち、その中心に“石組み”として大理石の彫刻を置いた。彫刻家・安田侃の作品で、優美な曲面で構成された作品は、地下鉄駅から来る人々の、「東京ミッドタウン」という街との最初のコンタクトを優しく演出する。地上には街の要となるように、同じく安田侃のブロンズ彫刻を置いた。

「月の庭園」では、月を愛する“あずまや”をシンボライズする大型の彫刻を設置することが検討された。桂離宮の月見台の現代バージョンとして、最終案は高さ6mの大きな作品となっ

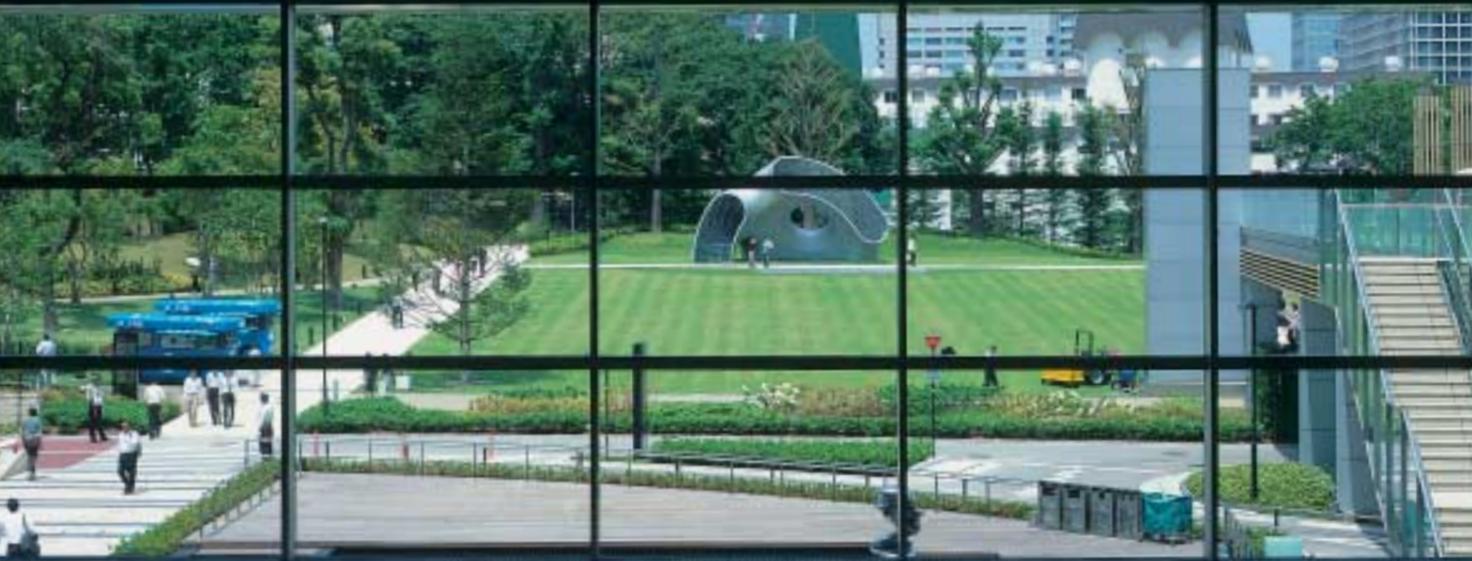
しみず・としお—美術評論家、学習院女子大学 教授、TOSHIO SHIMIZU ART OFFICE取締役、東京ミッドタウン・アートワーク・アートディレクター／1953年生まれ。東京都立大学卒業後、ルーヴル美術館大学修士課程修了。東京都庭園美術館、水戸芸術館現代美術センター芸術監督を経て、近年は展覧会やアートイベントの開催、パブリックアートのプロデュースを中心に活動している。

た。美しいアルミ鋳造の表面が昼間は庭園の緑に、そして夜間は月光に映える。

この作品は庭園を逍遥しながら見られるだけではなく、建築側からの視線も重視された。特にギャラリーやライブレストランのガラス越しのアイキャッチ効果が求められた。建物から緑の庭園を眺めることを想定した庭づくり、建築計画という伝統は、日本にも西欧にもあるが、現代都市ではいかにもまれである。緑を重視した「東京ミッドタウン」がいかに个性的であるかがこうしたところに現れているといえるだろう。

こうして“庭園”というコンセプトを下敷きアートワークが実現されていったが、ここを訪れる人々がそのことに気付くことを必ずしも求めている。しかし、街の中のアートワークとは美術館における鑑賞とは異なり、街と有機的に結び付くことがその存在理由となる。そのためには、こうしたしっかりとしたコンセプトを持つことが重要なのではないだろうか。\*

【\*】四神 中国、韓国、日本において天の四方の方角を司ると信じられてきた神獣。青龍（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）。平安京は四神に対応して建設された



コートヤード越しに芝生広場を望む。奥のアートは、フロリアン・クラール「フラグメントNo.5」（アルミニウム 2006）



安田侃「意心帰」（大理石 2006）（写真：谷裕文）



安田侃「妙夢」（ブロンズ 2006）



五十嵐威暢「予感の海へ」（木、墨 2006）（写真：谷裕文）

飯塚正紀  
MASANORI IIDUKA

「特集3」 デザインする街 5



五感に響く、魅力的な水辺に出会える榎町公園

昭和63年に「国の行政機関等の移転について」の閣議決定以来、都内における各政府機関の移転先等が順次明らかになり、平成11年度以降、防衛庁榎町庁舎等用地約7.8haの広大な跡地が発生することとなった。この跡地は、都心部に残された貴重な空間であり、周辺地域を含めた街づくりのための貴重な資源となるものである。このようなことから平成7・8年度の2カ年にわたり、当該跡地および周辺を含めた跡地利用計画における整備方針、整備手法について検討し、東京都の跡地利用の考え方を平成9年に報告書としてまとめた。



幾何学文様や巴紋から想を得た、楕状の滑り台

### 8つの整備目標

- ①オープンスペースの整備（計画区域内に、地域に必要な4ha程度の地区公園の整備）
- ②都心型住宅の整備
- ③業務、商業機能の導入
- ④文化・交流機能の導入
- ⑤公共・公益的機能の導入
- ⑥複合高度利用都市空間の形成
- ⑦周辺環境への配慮
- ⑧地形、地物の尊重と景観計画

### 整備手法

土地の取得者が明らかとならない段階で整備手法の検討はできないが、計画誘導手法として地区計画（促進区を定める地区計画）が考えられるとした。平成11年2月に国有財産関東地方審議会が開催され、「防衛庁本庁榎町庁舎跡地の処分」について、跡地の利用用途および処分方法等の諮問を受け、同審議会に「防衛庁本庁榎町庁舎跡地処分部会」を設置し、検討を行っていくことになった。港区は、臨時委員として助役が任命され、区の意見を反映させていった。

いづか・まさのり—港区 環境・街づくり支援部都市計画課都市計画係長／1950年生まれ。1974年、港区入区。建築課、再開発担当などを経て、2007年4月より現職。

更に、同年8月から国、東京都、港区で、「防衛庁本庁榎町庁舎跡地開発に関する三者協議会」を発足し、跡地の具体的な利用方針について協議を開始した。

平成13年4月に、本処分地を含む約10.1haに赤坂9丁目地区地区計画（再開発促進区を定める地区計画）を定め、土地利用の基本的な考え方等について定めた。

同年9月17日に一般競争入札が行われた。三者協議会の結果を踏まえ、開発条件として以下の条件を付した。

- ①地区計画の整備計画について企画提案書を作成し、提案すること
- ②空地等の整備  
敷地内に公共空地を整備し、歩行者専用道路と合わせて約2.6haの空地等を整備する
- ③歩行者専用道路の整備
- ④都道および区道の整備

入札後、事業者による企画提案書を受け、平成15年3月に地区計画の変更を行った。

更に、地下鉄日比谷線六本木駅との接続を図る地下道を追加等のため平成16年11月に再度地区計画の変更を行った。

このように、本地区は“地区計画”という都市計画制度を活用し、国、都、区との連携と事業者の民間活力を活用し街づくりを進めてきた。

六本木駅周辺には、東京ミッドタウンにオープンした「サントリー美術館」の他、「国立新美術館」、六本木ヒルズの「森美術館」と併せ、今までの六本木とは違う魅力が加わった。街づくりは、話題づくりばかりでなく、地域の皆さまとの連携を図りながら継続して進めていくものと考えている。今後とも地元区として六本木地区の発展を願っている。\*

## Show 商空間

### Botanica

設計：CONRAN&PARTNERS

#### 「Botanica」の植栽デザイン

吉谷桂子  
KEIKO YOSHIYA

レストラン「Botanica」のテラスガーデンは、屋上緑化スタイルのイングリッシュ・ガーデンである。店舗に付随したビル4階のテラスにある。

レストランのインテリアを含めた総合プランとデザインは、英国を代表するデザイン界の巨匠、テレンス・コンラン卿を中心としたコンラン&パートナーズであり、庭の基本構想もコンラン側のイメージを反映した。ただし、英国から送られてきた構想は、英国の植物が中心であり、日本にない品種や存続不能な植物も多く見受けられた。そもそも、昨今のイングリッシュ・ガーデンといえば、主にさまざまな宿根草を主体に使った草花がメインの自然風な庭のスタイルのことを指すが、穏やかな英国の気候と違い、東京の気候でイングリッシュ・ガーデンを維持するのは、日々の庭仕事を楽しむ個人宅でも、簡単なことではない。私は英国で約7年、帰国後の試行錯誤約8年という園芸経験を活かし、コンラン側のイメージをなるべく変えずに、東京の気候風土に合わせた植物のプランティング・デザインを担うこととなった。更に維持費を考え「ローメンテナンスで見応えのある植物構成」も課題であった。ビル風は必至、コンクリートの照り返しもあり、夏は37度、冬は-5度程度を想定しながら、ちょっとやさっとの乾燥や蒸れにも負けない、それでいてレストランというお洒落な営業空間で映えるタフな植物を生根系とデザイン面の両面で厳選し、四季折々に楽しめる自然風な庭を目指した。もちろん周囲のビル群の景色と対照的になるよう意図したことは言うまでもないが、最終的に150種以上、3,000株以上の植物を手植えた。結論として、周年を通じて常緑の草（主に白斑入りリュウノヒゲ）で全体を覆い、それを「フィリング・プランツ（間を埋める植物）」とし、その間に宿根草や球根花を散らし、それを「アクセント・プランツ（季節のアクセント）」とした。これは恐らく、都心で初めてのイングリッシュ・ガーデンの試みである。これから数年先の変化を見守りながら、都会のオアシスとして、人々の心を癒してくれる存在になることを切に願っている。\*

よしや・けいこ—フリーの工業デザイナー、広告美術ディレクターを経て、1992年渡英。約7年間の英国暮らしを経験。帰国後は百貨店や集合住宅、「国際バラとガーデニングショー」などのガーデン・デザインを担当。



上—フィリング・プランツの斑入りリュウノヒゲ。シンボルツリーは7本のオリーブの木  
下—店内からも庭の眺めを楽しめるよう草花を配置。季節ごとに異なる眺めを楽しめる



右—植物の配置は色彩の統一感、形と質感のコントラストを楽しむよう植栽した  
下—このテラスガーデンの最も美しいのがトワイライト。夏の夕刻にぜひ訪れてほしい。彫刻のデザインは、吉谷博光（写真4点とも：吉谷桂子）



暮  
らしを

デザインする

## ザ・リッツ・カールトン東京

インテリアデザイン：フランク・ニコルソン

すべてがラグジュアリーであること

リコ・ドゥブランク

Ricco M. DeBlank

ザ・リッツ・カールトン東京は、お客さまへの心のこもったおもてなしと快適さを提供することを心掛けております。45階にはホテルの顔となるロビーとレストランとラウンジ&バーがあり、46階には2,000㎡を誇るスパ&フィットネス、47階から53階が居心地の良いゲストルームになっています。ここで快適に滞在していただくには、すべてのものが上質でラグジュアリーであること、シンプルで使いやすいこと、温かい色調であること、そしてゆったりとしたスペースであること…。これらを重視した空間づくりを展開しています。

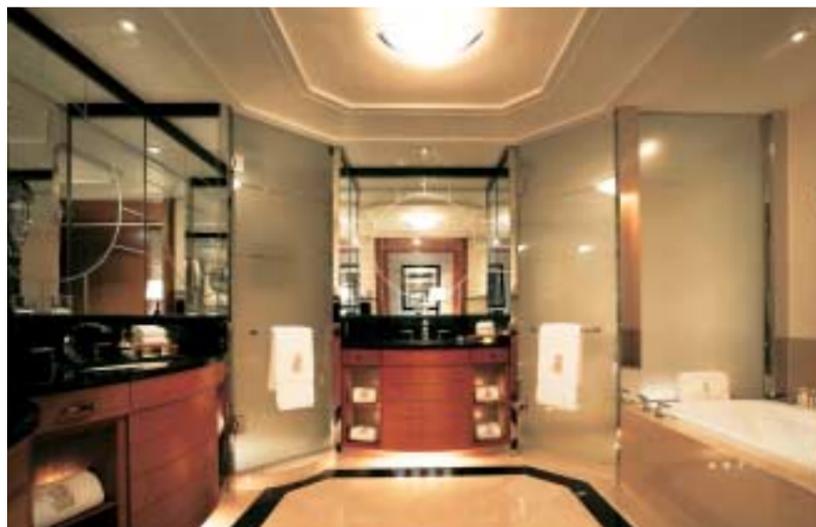
客室は東京のホテルでは一番大きく52㎡以上のゆったりとしたスペースを確保しています。そして東京の中で一番高いビルの高層部に位置した客室からは、遮るものがない素晴らしい眺望をご覧いただけます。その「東京の借景」がピクチャーウインドーとして綺麗に納まるように、テーブルや椅子などのインテリアは、窓の高さに合わせ、天候、季節や時間帯による移ろいをお楽しみいただけるようになっています。

広い客室にはキングサイズのベッド、またはダブルベッドを2つ備え、デラックスタイプの客室の場合、ベッドの前、両サイドにクローゼットを配したスタイルは、使いやすいととても好評です。室内は温か味のある色を基調にし、千代紙をモチーフにした壁紙を使い、温かみのある空間になっています。

また、水まわり空間もラグジュアリーです。バスルームはくつろいでいただく時間が一番長いことから、客室の35%というゆったりとしたスペースです。テレビ付きのバスルームでは、長く優雅におくつろぎいただくことができます。両サイドにトイレ、「レインシャワー」付きシャワー室が配置しており、ダブルシンクの構成は機能的だと好評です。

ザ・リッツ・カールトン東京は、「東京ミッドタウン」の敷地の40%が公園、緑という豊かな自然の中に建っています。その立地環境もまた、癒しと活力を与える、他にはない魅力で、これも最上級のホスピタリティーの一つと考えています。\*

リコ・ドゥブランク—ザ・リッツ・カールトン東京 総支配人/1964年オランダ生まれ。1989年、ハーグ・ホテル・スクール卒業後、ウォルト・ディズニー・カンパニーでフロリダとパリのホテル7軒の開業に携わる。1995年、ザ・リッツ・カールトン・ホテル・カンパニー入社。世界各地で副総支配人、総支配人を歴任。ザ・リッツ・カールトン大阪の総支配人を経て、2006年から現職。



上—スイートルームリビング 上質で温かみを感じさせる客室。機能性や快適性に優れたオリジナル家具、千代紙のデザインをあしらった壁紙をインテリアのアクセントにするなど、洗練された雰囲気でもとめられている  
下—バスルーム ダブルシンクを全客室に用意したバスルームは、大理石をふんだんに使い、贅沢で広々としている

暮らしをデザインする



スイートルーム 角部屋に位置するスイートルームには2面に配された大きな窓があり、高層階ならではの煌々夜景が堪能できる



檜町公園からミッドタウン・タワーを見る